「結婚による改姓」が女性にもたらすもの：
事実婚を選んだ女性の語りの検討

【研究目的】

本研究では、「結婚による改姓」を回避するために事実婚を選択した女性の経験を検討する。改姓と事実婚が女性にもたらすものを当事者の体験をもとに明らかにすることを目的とした。具体的には、１）改姓を望まない理由、２）事実婚を選択する理由、３）事実婚を選択したことで生じた困難、に関して検討した。

【研究対象者・　研究手法】

研究の対象は、「結婚による改姓」を回避するために事実婚を選択した女性である。１）生涯を共にするパートナーとしてお互いを認識しており、２）３年以上共同生活をしている者で、３）結婚による改姓を回避するために籍を入れずに事実婚を選択した、４）経済的に自立している 30-40 代の女性の方を対象とした。

計４名の対象者に対し、30~60 分程度の半構造化インタビューを行った。インタビュー内容は、同意を頂いた上で録音し、逐語録を作成し、ナラティブ分析を行った。

【分析結果・考察】

１）　改姓を望まない理由

当事者は、苗字は自身のそれまでの人生を象徴するものであるとするため、事実婚を選択することで祖父母代から続く女系の系譜を守らなくてはならないため等の理由で改姓を望まない。苗字は、当事者の生きてきた証であり、拠り所である。

２）　事実婚を選択する理由

当事者は、法律婚を回避するために事実婚を選択している。事実婚を選択すると、戸籍を変更する必要がない。当事者は、パートナーと共に歩む人生と個人の自由の両立を求め、事実婚を選択している。

３）　事実婚を選択したことで生じた困難

事実婚を選択する際に周囲からの同意が得られないケースがあった。当事者、パートナーは共に、事実婚の公表をためらう傾向も見られた。

「占われること」によって活路を見出した体験の検討

【研究目的】

本研究では何らかの迷いが生じたり、何かを明らかにしたい際に占いに行った者の体験に着目した。悩みを持った依頼者が占いに足を運び占われた体験によって、依頼者が何を得たのかについて、インタビュー調査を行った。対象者が占いに活路を見出そうとするまでの経緯を踏まえつつ、占われたことで依頼者は何を得たと感じているのかを検討した。検討を通して、一般に「非科学的」と見做される占いにおいて、現代人が１）占いに何を求めて占われ、２）どのような形で自らが進むべき方向性を見出しているのかを考察した。

【研究対象者・研究手法】

20 代～50 代の占い師と対面する形式の占い(対面鑑定)を受けた方を対象とした。占いを依頼するという行為に、何らかの積極的理由が存在した方に限定した。占いの具体的な内容や占い師との会話を調査するため、占いを受けてから経過した年数が 1 年以内である方を対象とした。また、本研究では対象者にとって印象的だった占い体験について検討するため、「占い体験を通して 1 つの大きな選択をした」方を対象とした。

女性 4 名の対象者に、60～90 分程度の半構造化インタビューを行った。インタビューは同意を得た上で録音し、逐語分析はナラティブ分析を用いた。

【分析結果・考察】

当事者の語りから、1)現状に問題を抱えて占いに行った対象者が、2)自らが知りたいことを占い師に尋ね、3)伝えられた占いの結果を受け止めることによって対象者に前向きな変化がもたらされたことが明らかとなった。対象者は占いを受ける以前に自分が 1 人で抱えていた現状を、占いによって他者の視点を通して再確認していた。これにより、対象者は自身が置かれている現状や、自分の潜在的な気持ちに対して新たな気付きが生じていた。

対面鑑定の占い師は、占い結果を依頼者に伝える仲介者として存在しているため、依頼者は占い師に自己開示しやすく占い師の言葉を受け入れやすい。占いの場では、依頼者がより積極的に自己開示し、現状に関して知りたいことをストレートに尋ねる、特徴的なコミュニケーションが発生していた。また、占い師が示した共感によって心境に肯定的な変化がもたらされた対象者もいた。対面鑑定は「占い結果」以外に占い師と依頼者の間で行われるやり取りによって、依頼者に変化がもたらされることが明らかとなった。

「リアコ」を続ける女性ファンの心理についての検討

【研究目的】

本研究では、特定の有名人に恋愛感情を持ち続けている女性ファンの心理について検討した。「リアコ」とは、「リアルに恋している」の略であり、「推し」に対して恋愛感情を向ける女性ファンやその行為、状態などを広く指す言葉である。本研究では、「推し」に恋愛感情を向けるファンの体験に焦点を当て、現代の女性に見られる独自のファンコミュニティのあり方、リアコの「献身的消費」と当事者が何を得ているのかについて検討した。

【研究対象者・研究方法】

インタビューを用いてデータ収集を行った。対象者は、特定の有名人を恋愛対象として捉え、片想いをしている女性ファンの方とした。ファンになってから 2 年以上、恋愛感情を認識してから 1 年以上その状態を続け、「推し」の活動に時間や金銭を費やしている方とした。時間的・金銭的な自由度を有することを条件とするため、18～29 歳で、収入がある方を対象とした。一般的な恋愛との違いを明確にするため、対面・オンラインを問わず、相手と 1 対 1 で会話した経験がないことを条件とした。4 名の対象者に、30～60 分程度のインタビューを行った。インタビューは対象者の許可を得て録音した後、逐語に起こし、ナラティブ分析を行った。

【分析結果・考察】

リアコは推しの一挙一動に強く心を揺さぶられ、時間や金銭に加えて、心理的なエネルギーを消費していることが明らかになった。リアコは、「リアコ」、「オタク」、「夢女」など、自身の立場にラベルをつける言葉を使い分け、推しや周囲のオタクと自分との心理的な距離感をコントロールしながら、推しを応援し続けていた。

当事者は、自分と同じ推しを推す「同担」に拒否感を感じていた。その拒否感は、リアコを始めた初期に特に強く、徐々に慣れて折り合いをつけていた。同担拒否の強いリアコは、別の推しを応援するリアコ同士で小規模の SNS コミュニティを形成し、互いの感情や推し方を尊重しながら交流していた。

推しとの恋愛が成就する可能性の低さについては、「諦め」を前提としていたり、あまり目を向けないようにしたりしていた。推しへの恋愛感情を、自身の充実感や向上心と結びつけ、主観的に得ているものが大きいと感じることで、成就する可能性の低さに目を向けずに、前向きにリアコを続けていた。本研究の対象者 4 名全員が、今後もリアコを続けていく考えを示した。

高校生のオンラインゲーム利用の検討
：長時間利用から脱却までの過程に焦点を当てて

【研究目的】

本研究では、オンラインゲームに多くの時間を費やす高校生が、大学受験に直面した際に抱えた葛藤について検討した。具体的には、1)高校生がオンラインゲームを長時間利用するようになるまでの経緯、2)長時間利用から抜け出すまでの心理的プロセスについて検討を行った。

【研究対象者・研究手法】

本研究では、1)マルチプレイ型のゲームに熱中した過去を持ち、2)高校 3 年生の 4 月から翌年の 3 月までの間で受験をきっかけにゲーム利用を削減した、あるいは一時的にやめた経験がある現在 20 代の方を対象とした。3)ゲームを利用していた時間が平日で 2 時間以上、休日では 5 時間以上利用で、週に 5 日以上のオンラインゲームを受験時期前のゲーム利用について、「使いすぎている」という自覚を持っており、4)進学後は利用時間を決めるなど、ある程度自分自身でオンラインゲームの利用をコントロールすることができる状態にあることを条件に協力者を募った。4 名を対象にインタビュー調査を実施し、インタビューの内容は録音したうえで逐語録に起こし、ナラティブ分析を行った。

【分析結果】

４名の対象者は、オンラインゲームを長時間利用することに対して「使いすぎている」という自覚を持ち、大学受験の際に熱中度合いを下げようと試みていた。インタビューでは、ゲーム上の他者と関わることで、ゲームを遊ぶ楽しさを覚え、ゲーム利用が長時間化していた様子が語られた。現実生活に孤独感を感じ、居場所や他者との繋がりを求めたゲーム利用をしている者もいた。

当事者の語りから、1)オンラインゲームプレイヤーは、ゲーム性のみならず、コミュニティ性に重点を置きながらゲーム利用を継続し、2)大学受験に直面した際は、ゲーム利用の制限を試みた。3)それぞれ葛藤を感じながらも長時間のゲーム利用からの脱却を試みていたが、なかにはゲーム利用を自分の完全なコントール下に置くことができない者もいた。

長時間のゲーム利用によって現実生活には悪影響が生じていたが、ゲームの利用制限の失敗を通して得た経験やゲームを通して得た人との関わりの学びから、ゲームを単にマイナスな要因として捉えることなく自らの経験を肯定的に捉えていた。

母親への移行：妊娠・出産及び育児をめぐる母親の語りから

【問題と目的】

近年，少子化や核家族化，地域のつながりの希薄化などを背景に，育児に否定的な感情を持つ母親は増加する傾向にある。育児の大変さに関心が向けられるようになって久しいが，そもそも母親であるとされる女性たちはいかにして「母親」になっていったのだろうか。妊娠あるいは出産によって生物学的な意味では親になることと，心理的に親になることは同義とは言えない。本研究は，女性たちが妊娠・出産及び育児をどのように経験し，その過程において，母親である自分をどのように確認していったのかを検討したものである。母親になっていくプロセスを，妊娠の発覚から出産後の育児まで長期的に検討し，母親の側から捉えることを試みた。自身の身体の変化や，夫，両親などの周囲の人や子どもとのかかわりから，母親である自分がどのように意識されていったのかに焦点を当てた。

【方法】

対象者は，現在 20～40 代で，妊娠中の体験と乳幼児期の育児の体験を詳細に語ることができる母親とした。第一子の年齢が小学生以上であることを条件とし，現在の子どもの人数や家族構成は問わなかった。知人の紹介で，研究にご協力いただくことを了承した 3 名に，それぞれ 1 時間程度のインタビューを行った。インタビューでは半構造化面接の手法を用い，対象者にとって初めての経験，すなわち，第一子の妊娠・出産及び育児の体験を伺った。主に，妊娠中の体験と子どもが 0 歳から 3 歳までの育児体験を尋ね，それらについて語られた主観的経験の内容を，ナラティブ分析によって質的に検討した。

【分析結果及び考察】

母親たちの語りから，妊娠期に生じる身体的な変化や夫や実母とのかかわり，妊娠期からの子どもとの対話によって，母親としての自分を確認していくことが明らかになった。妊娠に伴う身体的変化を敏感に感じとり,始めは妊娠の事実のみを認識していた段階から,自身に生じる身体的な困難に「子どものため」という意味づけを行うようになっていった。命がけの出産を経て，乳児期の子どもの生存が自身に委ねられているという意識を持ち，子どもが成長し，自身が子どもにとって唯一無二の存在になっていることに気がついたとき，母親として積み上げてきた自覚や責任を振り返る様子が明らかになった。身体的な変化によって子どもへの意識を強めていく自分と，以前と変わらない生活を送る夫とを比較して，自身の親になる意識に目が向けられていた。出産が近づくと，子育て教室に参加するなど，夫とともに子どもを迎える準備を進めていった。実母は育児における重要な協力者であり，かつて自身を育ててきた母親を今の自分と重ねていた。母親たちは、子どもとかかわり，成長を見守るなかで，自身もいつの間にか母親として成長していたという母親観をもっていることが明らかになった。

インターネット上における誹謗中傷体験の検討
：被害者の語りに注目して

【研究目的】

本研究では、Twitter 上で誹謗中傷を受けた被害者の体験を検討した。Twitter 上でのやり取りにおいて、自身が不快に感じる対応を受けたことによって、どのような感情の変化があり、事態にどのように対処したかについて検討した。誹謗中傷を受けた経緯や、どのような援助および対処方法をとったのかについて明らかにし、誹謗中傷を受けた経験が、その後の SNS の使い方や、インターネット上でのやりとりの仕方をどのように変えたかについて検討した。

【研究対象者・研究方法】

1）Twitter 上で誹謗中傷を受けた方、2）心理的安全を考慮し、誹謗中傷を受けた体験から 1 年以上経過している方、3）被害当時、年齢が 20 代であった方を対象とした。誹謗中傷は SNS 上で悪口を言われたり、なりすましや根拠のない嘘を拡散されるなどの嫌がらせを受けたりという経験とした。比較的短期間（半年以内）に自体が収束し、犯罪行為や金銭問題に発展していないケースを対象とした。データ収集はインタビュー調査を用いて行った。対象者の方に同意を得た上で録音、逐語録を作成し、ナラティブ分析を行なった。

【分析結果】

本研究では、被害者には誹謗中傷を受ける中で、恐怖、面倒くい、呆れなどの気持ちの変化があることが明らかになった。Twitter の利用歴や、利用する目的の違い、相談することができる人の有無などによって、対応に違いが見られた。Twitter を利用する目的は、不特定多数との交流、自身の意見を表明する場としての利用などが見られた。事態に対処する中で、言い合いになり暴言の応酬を行ったり、無視をしたり、話し合いを模索するなどのやりとりが見られた。気持ちの表明の仕方によって対処方法が異なるのではないかと考えられた。誹謗中傷の被害者は、相手に対して誹謗中傷と受け取られる可能性のある自身の言動を反省し、後悔していることが明らかになった。現在に自身の言動を振り返ることで、自身の言動も誹謗中傷だったのではないかと考えていることがわかった。誹謗中傷体験後の SNS の利用方法については、発信をしないようになる、気をつけて利用するなど様々であった。対象者のその後の SNS の使用方法が慎重になったことは共通しており、自身の言動に対する気づきが、SNS の利用に影響していることが推察された。

「陰謀論」の検討：陰謀論者の家族の体験に焦点をあてて

１，研究目的

本研究では、陰謀論を「物事の事実や原因において、認識論的権威を否定し、陰謀に原因を求めた説」と定義した。本研究では、陰謀論を真実と思い込んでいる陰謀論者の家族を対象とし、家族が陰謀論者であることに気づいてから現在に至るまで、どのような体験をしたのかを検討した。

２，データ収集と分析の方法

半構造化インタビューを用いて、3 名の方に 70~90 分程度のインタビューを行った。インタビューの際、許可を得て録音し、逐語録を作成した。分析は、逐語録を基にナラティブ分析を用いた。研究対象者は、①陰謀論を信じている方の、配偶者、親子、兄弟姉妹、同居している祖父母などにあたる方、②19 歳から 60 歳代の方、③現在、陰謀論を信じている家族との日常的なやりとりができているなど、家族関係が安定している方、④ご自身を含めたご家族が、陰謀論をきっかけとする違法行為を行っておらず、経済的問題、心身の問題を抱えていない方、の 4 つの条件に当てはまる方に行った。

３，考察

対象者は家族の言動に、陰謀論を主張する動画を見るように指示するようになるなどの変化を認めていた。次第にその違和感が無視できないほどに大きくなり、家族が対象者に陰謀論を信じるように言い含めるようになると、対象者は家族が陰謀論者であると認めざるを得ない状況になっていた。

いずれの対象者も、当初は科学的な根拠を用いて反論を行った。しかし、陰謀論に根拠を求める家族との間では、真偽の決着がつかなかった。お互いが主張を譲らないため、次第に、言い争いに発展し、何度か衝突を繰り返すと、お互いに陰謀論に関係する話題を避けるようになり、関係の破綻を避けるようになっていた。お互いにとって程良い距離を新たに築いたが、対象者は、陰謀論者としての家族を呼び起こさないよう、緊張感を含む関係となった。

対象者は、陰謀論を信じる家族が SNS を利用していく中で陰謀論と関わっていたと考えていることが分かった。対象者の家族が陰謀論を真実だと思い込む過程で、SNS で陰謀論を主張するコンテンツを積極的に選択していたと考えられている点は共通していた。一方、対象者は、陰謀論のファクトチェックを SNS で行ったり、自身の体験を SNS やオンラインブログで積極的に発信していた。